

昭和38年3月1日、北陸線の車窓から初めて見た金沢近郊は一面白銀の中に短い電柱が延々と整列して立っていた。曇り空の下の空気は重そう、ここは太平洋側に比べて電柱も短いのかと思った。

しかし縁者一人いないこの町に下車して、その年の記録的豪雪を体感した。電柱は人丈を超える雪の中に埋まっていた。そこに高校の制服のままズック靴で降り立った。足先の冷たい受験であった。この年の雪捨て場には、7月に入っても雪塊が黒く消え残っていた。

その秋、“スキー映画の夕べ”でWV同期の伊豫君が景品のスキーを引き当てた。だがスキーはしないとのことで、チャンスとばかりに格安で譲り受けた。ヒッコリー合板の205cmだが、別に靴やストックが必要と知って愕然であった。ビンディングに至っては「何それ」である。それでも何とか一式揃えて糸魚川行きの夜行鈍行に乗り込んだ。

この山の坊での合宿で、生まれて初めてスキーというものを履いた。ロープトウが1本あるきりのスキー場で、しかもロープトウを使わない合宿であった。まず、全員がスキーをつけて縦一列に並び、一步步上に向かって新雪を踏み固めてゲレンデをつくる。適当な高さで“直滑降はこうするんだ”という指導があつて、1年生は“ハイ”と滑り始めたが、止まり方は教わっていなかった。はじめに並んだあたりはたちまち修羅場と化した。中には器用に滑って、その先の藁ボッチにアタマ突っ込んでペッペツという人も。親を偽って(大学の専門書は高いのだ!ン?)入手したスキー靴は1日で中までびしょ濡れ、オシリもびしょ濡れと惨憺たるものだった。

それでも次の年にはボーゲン覚えて国道まで降り、そのまま大糸線平岩駅までたどり着いた。大型トラックが走る国道のガードレール脇の除雪々塊の上を、キスリング背負ってスキーで行くのは冷や汗ものだった。雪塊がガードレールを超えるところでは、右に落ちれば轢かれてサヨナラ、左に落ちれば姫川の谷底まで直下行である。自動

車とスキーの競演はテレビでもおなじみだが、トラックとのは見たことがない。フラフラとキスリングが上ったり下ったりして行くのだから、横に行くトラックの方こそ冷や汗ものだったにちがいない。

このガードレール脇のスキー経験は、医王山キゴ山から医王口バス停までの帰りにも生かされた。

その冬は嬉しくてスキーかついで卯辰山へ行き、あちこちの斜面で試してみた。また獅子吼高原であこがれのロープトウも試した。一本のロープに次々人が繋がって上げてもらうもので、一人がころぶと後続全員が先へ行けずにそこそこに転がる、というシロモノだった。高山生まれでも、鎌倉や岐阜育ちで雪は好きだったが、この手の遊びはなかなか新鮮だった。

一度だけ研究室で、どこかのスキー場へ行ったことがある。私以外の全員がスキー初めてときいて、早速“直滑降はこうするんだ”とやって江戸のいや山の坊のカタキをうった。そのまま調子に乗って滑ったのだが、風呂に入って見た我が両尻には青タンがくっきりであった。

その後、海の生物を相手にして夏の2ヶ月半と冬の2週間は能登の海で過ごした。素潜りとシュノーケリングや釣りは覚えたが、山やスキーとは疎遠になってしまった。家を出る時4年経ったら帰る約束だったがそのまま居着いて半世紀、金沢は故郷になってしまった。何とか職を得ても、子供が同伴してくれるまではスキーから遠ざかっていた。だが彼らはすぐに親をおいてしまったので、数年後には再びスキーから遠ざかってしまった。

“錆びたスキー”ではシャレにもならない。帰省した親不孝者が、ヤワな老人用に軽いスキーを教えてくれて、これが最後と購入したのは還暦少し前だった。退職後の暇つぶしの訓練(何事にも訓練が大切!?)にと再挑戦し始めたころ、同期山村君から野沢のOBスキー合宿に誘われて現在に至っている。

訓練だったはずが楽しくなってもう一度スキーを買い替えた。その頃また親不孝者が現れて、

前のを持ち出して売りさばいたらしいがその代金はもらっていない。



(2017年 第20回スキー合宿にて)

さて、退職のときにも将来の夢はと問われたが、「もうそんなもの有る訳ない」というトシになってしまった。なぜ山に登るのかなどと、七面倒くさいことを問う人もいなくなった。楽しいからスキーや山登りをする。理由は無い。それでも問われれば「姨捨、いや爺捨てだ」と答えることにしている。

逆に、「気をつけて下さいよ。何か有っても褒められないトシですから」と言われる。有り難いことだと思う。身体が動くのは有り難いが、動ける範囲は年々狭まっている。それでもいい。動ける範囲で動けばいい。それが自分に与えられたものなのだと思うようになって来た。明日は知れぬと言ってもおかしくないトシになった。元気のために、確かに機能性成分のある野菜もあるし、自分もいくらか携わって来た。だがしかめ面してこれは身体にいい草だ、お茶だ、何とか食品だなどと言っても、コマーシャル以外で元気になったと言う話しは聞いたことがない。ワラビには発癌物質があると明らかにされているが、いずれ発癌量のトラック一杯は食べられない。これは季節限定春の楽しみである。高級アルコール系脂肪酸たっぷりの脂肪が、お茶くらいで減る訳はない。元は安酒と過食。だがドクターストップ以外のものは何でも楽しむことにしている。要は楽しく食べることだと思う。ただ飲食運動何であれ、個人個人にはその人のアタワリがある。一人一人違って、これを個性という。トシを得ると自分の度が分かってくる。過ぎないように気をつけようと意識している。

さて、遊びというのは仕事あつてのもののように、無職になると遊びが仕事化してくる。猫の額ほどの庭ひっくり返しての菜園などもそのひとつで、相撲取りよろしく日々これ精進しても結果がついて来るとは限らない。しかし、消費する方は精進努力の全てを遊びと心得ているから感謝や思いやりのない。安くなった時にしか出来ないとか、虫がいるとか騒々しい。カネを作っているのではない！というやっばり遊びか。ナメクジはちと困るが、そも虫も食わないものなど美味い訳がないし安全なものか。

輪廻転生などとむつかしいハナシではない。我々は他の生き物と同じ土俵の上で同じ原理で生きているから、匂があつてナチュラルなのだ。だいたいハチノコだつてイナゴだつて、ついこの間まで食料だつたではないか（見なけりゃどちらも結構イケル）。

自給率の低いこの国はいずれ食糧難にみまわれるといつても説得力はさらさない。“米一粒にも感謝していただきましょう”と言っていた我が幼少時の善き教育はどこへいった。などとぼやいてないで今年も白山やスキー合宿参加のために少しは身体を鍛えよう。と思うが、気持ちはあるがすぐめげるのがトシというもの。

運動する子は元気な子。運動している元気なジイさん。何にもしてないのん気なジイさん。お口は元気なふしぎなオバさん。というような無駄口たたくとロクな結果を招かない。経験にまさる学習なし。「男はだまって、歩いて来ま〜す」。これでも少しはストイックなのだと思榮切ってみても、本音はカネの掛からぬ公認運動。ではサヨウナラとトンズラよ。♪痛む足腰おぼつかなく〜♪  
(無声のまま浄瑠璃調) ベンベン・・・。

余談だが、ヒトは経験よりもおのれの知識と分析力にたよるからなかなか学習しない。近頃は知識と分析もスマホやネットにたよって他人任せにするからフェイクニュースやフェイク分析に騙される。さてこの拙文もどこまでがフェイクでないのやら、書いている本人にも分からなくなってきた。健忘症の上に認知症も入ってきた。事実誤認の抗議があつても当然責任は負えない。